当事者の「声」を聞くということ — A さんの“ひきこもり始め”をめぐる語りから —

From the Perspective of “*Tohjisha*” :
Narratives about ‘the Beginning of *Hikikomori*’ by the Members of a Self-Help Group

石 川 良 子
ISHIKAWA Ryoko

The purpose of this paper is to discuss attitudinal problems that researchers tend to have in interview research, specifically in the context of doing research on ‘*Hikikomori*’ individuals. I consider this through an analysis of how I carry out interviews with ‘*Hikikomori Tohjisha*’ persons who regard themselves as ‘*Hikikomori*.’ In so doing, I focus especially on the narratives concerning the ‘beginnings’ of their ‘*Hikikomori*’ and on how I transcribe and interpret these narratives. In the conclusion, I suggest the importance of researchers clarifying their own unconscious assumptions about ‘*Hikikomori*.’

1. 問題の所在

社会調査におけるインタビューは、ある「問題」の当事者に直接話を聞くことによって彼らの価値規範やパースペクティブに接近し、そこからその「問題」を、ひいては「社会」を読み解こうとする試みといえる。しかし、当事者とされる人々にインタビューを行えば、それはその人たちの「声」⁽¹⁾を聞いたことになるのだろうか。本稿の主題は、私が〈ひきこもり〉の当事者に対して行ったインタビューの一局面を提示し、その記述・解釈を通じてこの問いに答えることである。まず、私が〈ひきこもり〉の当事者をインタビューの対象に選んだ背景について簡単に述べておきたい。

〈ひきこもり〉に対する関心は犯罪報道⁽²⁾を契機に急激に高まり、大量の情報が提供されるようになった。しかし、当事者自身が発信した情報は非常に少なく、臨床家や援助機関の代表者によるものがほとんどである⁽³⁾。彼らは「現場」での実践に基づいて様々な〈ひきこもり〉を「定義／診断」し、「処方箋」を提示する。その著作で紹介される事例には数多くの当事者が登場しているが、それはあくまで「治療／援助」の対象として切り取られた当事者である。それゆえ、臨床家や援助者による議論から、当事者自身が〈ひきこもり〉をどう捉えているのかうかがい知ることはできない。それにも関わらず、当事者の「声」が聞かれないまま「現場」では援助策が模索され、一方巷間では〈ひきこもり〉は「『分かったもの』として片付けられ」[塩倉 2000:15] ているように思われる。

以上のような現状把握のもと、私は当事者視点に立った議論の必要性を強く感じるようになった。そして、「治療／援助」では聞くことのできない当事者の「声」を聞くためにインタビューを行うことにした。だが、こうした当事者視点を強調する試みには、常に冒頭に挙げたような問いが付きまとう。〈ひきこもり〉の当事者ではない私／研究者が当事者にインタビューを行ったとしても、それは当事者視点に立ったことにはならないし、またその「声」を聞いたことにもならないのではないか。この問いに答えるため、本稿は

「対話的構築主義」[桜井 2002] の立場に依拠してインタビュー・データを検討する。

このアプローチの特徴は、語りを「インタビューの場での語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体」[前掲書:30-31] と捉え、インタビュアー自身をも「調査の重要な対象」[前掲書:9] として位置づけるところにある。そして、インタビューが「意味やリアリティの共同産出の過程」[前掲書 :152] であることを強調する。桜井によれば、インタビューとは「質問／応答の連鎖」[前掲書:110] という特有の形式を備えた会話であり、この連鎖を通じて語り手とインタビュアー双方にとって納得のいくストーリーが構築されていく。ただし、「共同産出」といっても質問は主にインタビュアーによって行われ、それゆえインタビュー過程は一般にインタビュアーによって統制される。そのため、インタビュアーがテーマに関して事前に持っている知識やイメージは、その場で語られるストーリーに決定的な影響を及ぼす。したがって、インタビュー内容を記述し解釈する際にはインタビュアーもまたその対象としなければならないのである。

以上を踏まえ、本稿ではAさんへのインタビューの検討を通じて、当事者に対してインタビューを行えば、彼らの「声」を聞いたことになるのか、という問いに答えたい。

2. 考察の対象

インタビューは2001年3～8月までに24～30歳の男女8名を対象に計9回行った。対象者は首都圏で活動する自助グループと、「経験者・家族・支援者」による会合の参加者である⁽⁴⁾。これらの場に参加していることから、彼らが自らの状況を問題とみなし、その解決を指向していることがうかがえる。インタビュー当日は、どのような経験や判断基準を以て自らを〈ひきこもり〉と認識するに至ったかを中心に、時系列的に話を進めた。

なお、私は調査計画当初から対象者として「当事者」を想定していた。従来この言葉は何らかの「問題」を抱える当人を指すものとして広く用いられてきた。それは、本人の認識とは関係なく周囲が付与するラベルとして用いられることもあれば、ある「問題」を抱える本人の認識を表すために用いられることもある。ただし、今回データとして扱うインタビューは、「当事者」自身による〈ひきこもり〉の捉え方を知りたいことを意図して行ったものである。したがって、本稿ではこの言葉を「自分は〈ひきこもり〉である、またはその経験があると認識する人」という、より自己認識を強調するものとして使用する。

さて、インタビューでは様々な人が様々なトピックについて語ったが、本稿では当時自助グループの代表を務めていたAさんを取り上げ、その中でも“ひきこもり始め”に関する語り限定して検討する。なぜなら、私が〈ひきこもり〉について事前に想定していたことを最も容易に読み取れるのがこの話題だからだ。その理由は以下2点。第一に、Aさんへのインタビューは最初に行われたもので、私が自分の前提に対して全く無自覚なまま話を進めていたこと。しかも、このインタビュー調査自体を開始して間もない頃だったため、当時私が持っていた〈ひきこもり〉に関する知識は、臨床家や援助者、ジャーナリストによる著作から得たものがほとんどだった。第二に、“ひきこもり始め”というトピックが、私がインタビューに持ち込んでいた前提の自覚化をもたらした。この話題は、インタビューで対象者と私の話が最もかみ合わず、編集作業も非常に手間取るものだったが、それは私がある特定の枠組みに囚われていたためだということに気づいた。以上から、本稿では考察の対象をAさんの“ひきこもり始め”をめぐるやりとりに限定した。

Aさんへのインタビューは2001年3月と7月に行ったが、これに先立つ同年1月にも自助グループ代表者他2名を交えてプロフィール程度話を聞いたことがある。Aさんは当時26歳。会社員の父親と専業主婦の母親と同居、兄弟はいない。茶髪でよく日に焼けており、がっしりした体格をしている。彼は私が会った初めての当事者だったのだが、思い描いていた当事者のイメージとは程遠く、少々面食らったことを記憶している。

Aさんが〈ひきこもり〉という言葉を知ったのは、偶然買った雑誌に関連記事が掲載されていたからだったという。そして、自分も〈ひきこもり〉なのだという認識に至り、その記事で紹介されていた病院へ通い始めたそう。これが「転機」となって、デイケア・グループや公立施設の青年グループ、そして自助グループにも参加するようになっていったという。インタビュー当時は、代表メンバーの1人として立ち上げた自助グループの運営などで忙しく日々を過ごしていた（現在は代表を降りている）。

私がインタビューをお願いしたのは「転機」から2年目のことである。1度目のインタビューで「今、自分はひきこもりですか？」と尋ねると、Aさんは「ノー」と即答し、「経験者」だと語った。そして、2度目の時に改めて「経験者」という言葉の説明を求めたところ、彼は自らを「完全に抜け出した人」と「当事者」の「中間」に位置すると認識しており、その位置を「経験者」と「便宜的に」呼んでいると答えた。また、通院開始という「転機」以前は「何が何だか分からない」「方向喪失状態」だったとAさんは語っている。このように、今回扱うデータは「混乱」の渦中からそれについて語られたものではなく、ある程度「混乱」を抜け出した現時点から当時を振り返って語られたものである。

3. インタビューアは当事者の「声」を聞いているのか⁽⁵⁾

(1) 複数の“ひきこもり始め”

〈ひきこもり〉といえば、「普段はほとんど外出しないまま何年にもわたって自分の部屋に閉じこもりつづけ」[斉藤 2002:26] ている状態（人）といったイメージを思い浮かべる人が多いだろう。だが、「ひきこもり始め」としてこのような生活を始めた時点を語る対象者はいなかった。それどころか、始まりを特定することは容易なことではなく、結果的には、「ひきこもり始め」と判断可能なことがいくつも語られた。

ここでは、1度目のインタビュー開始後およそ15分間のやりとりを検討する。この時、録音開始前におおまかな経緯を確認しながら年表形式のメモを作成した。このメモは起点が大学2年次、終点がインタビュー実施時点となっていて、「ひきこもり以前・最中・以後」という3つの時期区分が設けられている。その時の「以前」と「最中」の境目は大学卒業前後だった。以下で提示するやりとりの焦点は、その境界の画定である。

Aさんは中学・高校・大学とエスカレーター式の学校に通い、大学進学までは順調だったが、2年に進級する際に希望通りの学科に進めなかったという。そのため大学生活に意味を見出せず退学を考えることもあったが、その後「何をしたらいいか、結局見つからなかった」という。そして、その頃から将来の進路に対して不安を感じ始めたそう。以下に提示するのは録音開始約5分後、以上の話題に続く部分である。

[1]

I：ま、①緩やかにとは言え、ひきこもり始めがこの旅以来でしょ？

A：②うん、その前、前ぐらいかな。

I：だとすると、そこになるまでに3年ある。この間〔大学2～5年〕。

A：あのねー、サークルはまじめにやってたのよ。だけどまあ、実質3年で引退だから。ここまでは〔大学2年〕は一応、あんまり、不登校とかやって学校行かなかったんだけど、この年〔大学3年〕からは一応ちゃんと行くようになって、ここまでは一応〔友人との〕つながりとかあったんだけど、(中略)③このへん〔大学4年〕から徐々に、4月5月くらいからあんまり、一応、まあ、行かなきゃいけないから、週に、〔授業が〕15コマくらいあったから、行ったんだけど、だんだん、ちょうどこの年〔大学4年〕かな、〔学校に〕行かなくなって、

I：まず最初に学校に行かなくなって、

A：外には出てたけど、サークルとかには顔出さなくなってたし、

I：④ほかに友達とかは〔いなかったのか〕、

A：それがね、サークル一本だったから、いたんだけど、⑤ちょうどこの頃〔大学4年〕から、まあ、〔友人たちは〕忙しくなって、大体4年になると、コマ〔授業〕がないから、〔学校に〕来ないじゃない。と、行っても会わないし、……で、大体皆、ここ〔大学4年次〕で卒業していなくなるわけだから、この年〔大学5年〕になるともう、留年した奴か、あとは一浪して入ってきた友達とかぐらいいかないから、この年〔大学5年〕になると……といよいよあれで、まあ、⑥しょうがなく、就職活動はしたものの〔内定をとることはできず〕、だから、えい、知らん、行ってしまえって感じで〔旅行に出かけてしまった〕。

I：もう、⑦既にこの大学4年の頃から走り始めてた。

A：⑧走り始めてた。うん。

I：⑨ここ〔大学卒業前後〕へ向けて。

A：うん、⑩厳密にはもうここ〔大学2年〕なんだけど。

この時、私はAさんの“ひきこもり始め”を特定しようと質問を重ねているが、それに対する彼の明快な返答はない。まず、冒頭でAさんは、私の問いかけに対して「旅」の「前ぐらい」から「ひきこもり始め」たと答えている(下線部①②)。この「旅」とは、内定を取れないまま就職活動を中断して出かけた旅行のことである(下線部⑥)。Aさんは4年に進級する時に特別な理由はなかったが留年し、友人たちから1年遅れで就職活動を始めた。だが、筆記試験には通っても面接には通らないということを繰り返して、「とりあえず逃げるんだ」という感じで3ヵ月ほど旅行を続けた。戻ってきた後も就職活動を再開することはなかったそうだ。①の後では、その「前」の3年間のことに話題が移行している。そして、4年次にはあまり学校に行かなくなったという話を受けて私は「ほかに友達とかは〔いなかったのか〕」と聞き出そうとしているが(下線部④)、Aさんははっきりと答えず、徐々に友人と疎遠になったと語った後(下線部⑤)、ようやく「走り始めてた」という私の言葉にうなずいている(下線部⑦⑧)。だが、私がメモを指して念を押すと(下線部⑨)、Aさんは「厳密には」大学2年の時だと語り、それを留保している(下線部⑩)。

このやりとりからは次のことが読み取れるに過ぎない。学科選択を契機に徐々に学校に行く回数が減り、しばらくの間サークルには顔を出していたが、そのうち友人とも会わなくなっていった。だが、いつから“ひきこもり始めた”のかは分からない。この時、Aさんがメモを眺めて首をかしげつつ語っていたこと、最初に「以前」と「最中」の境界を大学卒業前後にしたにも関わらず、その通りに話が進まず多少混乱したことを記憶してい

る。

次に提示するのは〔1〕のおよそ10分後のやりとりで、「厳密には」2年生の時から「走り始めてた」というプロセスを確認しているところだ。

〔2〕

I：⑪で、98年の、この〔大学〕6年になった時には既に……

A：⑫うーん……

I：⑬あ、いわゆるひきこもりかも、みたいな……

A：最初はまあ、一応5年で、

I：5年で、

A：ってことは（年を数えて）5年いっぱいだから、ここ〔大学5年次〕で就職決めて卒業する予定だったんだけど、ま、結局決まなくて来年〔就職する〕ってことになったんだけど、でもま、卒論は出して、卒業しちゃおうというつもりだったんだけど……単位は良かったんだけど、卒論を出し損ねるという大失敗をして、（笑）、で、もうコマ〔単位〕はとっちゃってあるから授業は行かなくていいから、あと卒論だけだから、そのための半年。この期間〔大学6年次の9月まで〕は学校行く必要全然ないから、うーん、一応科目登録のあれ〔書類〕だけ出しておしまいだから。

I：⑭ずっと何かやってたりとかは、なかったの？毎日どんな感じで。

A：⑮うーん、だからその頃はもう半ひきこもり生活に入ってたのかな？

ここで私は、メモを指差しながら「6年になった時には既に」「いわゆるひきこもり」だったのかと、メモに記された時期区分の妥当性を確認しようとしている（下線部⑪⑬）。しかし、Aさんはそれに答えず（下線部⑫）、大学5年で卒業論文を提出し損ねて再度留年した6年次のことを語り始める。そして、その間は全く学校に行く必要がなかったということを受けて、私が「ずっと何かやってたりとかは、なかったの？」とたたみかけると（下線部⑭）、Aさんは「うーん」と考えながら「その頃はもう半ひきこもり生活に入ってたのかな？」と答えている（下線部⑮）。「半」という表現からは、Aさんがそれ以降を“本格的”な「ひきこもり生活」と捉えていることが読み取れる。

さて、〔1〕と〔2〕に出てきた“ひきこもり始め”と思われるのは次の4つである。（a）2年進級時の学科選択後（下線部⑩）、（b）同期が就職活動を始めた時期（下線部⑦⑧）、（c）自分が就職活動を始めた時期（下線部①②）、（d）大学卒業の前後（下線部⑮）。

このように整理してみると、始まりを1つに特定できないことは一目瞭然だが、私はこのことに気づかないまま他の対象者にもインタビューを行った。一連のプロセスを整理しようとして、ある時点について「この時はもうひきこもっていたんですか？」と尋ねると（下線部①はその典型）、Aさんと同様要領を得ないやりとりが続いた。

こうしたことを何度か経験して、私はようやく〈ひきこもり〉が“いつから”と区切れるようなものではないことが分かってきた。そして、インタビューを始めた頃の私が、ただ1つの明確な“ひきこもり始め”があるとア・プリオリに想定していたことを認識した。しかも、私はその想定に合致するような内容を対象者に語らせようとしていたのである。

たとえば、〔2〕にあるAさんの下線部⑮の「半ひきこもり生活に入ってた」という語

りは、その直前の「何かやってたりとかは、なかったの？」という問いかけに対する答えだが、その質問は“何もやっていなかった”という答えを引き出そうとするものであり、Aさんはそうした私の期待に応えただけのように思える。そして他の部分も、Aさん自身があらかじめ考えていた“ひきこもり始め”を聞き取ったというよりも、むしろ私がAさんにそのように語らせたと見た方が適切なように思われる。

そこで、次にインタビュアーである私がどのようにインタビュー過程を統制し、自分が思う通りの答えをAさんから引き出そうとしていたか見ていく。

(2) インタビュアーによるインタビュー過程の統制

以下は、[2]の最後の「半ひきこもり生活に入ってた」という語りに続く部分である。

[3]

I：⑩自分の中で、これ〔が〕ひきこもりって、今から思うと、〔ひきこもり始め〕っていうのはどこで判断〔しますか〕……

A：⑪家にいたってこと自体はそんなこもってたとは思わないんだけど、こう、外に出ても何か、つまらないというのかなあ……出かけたりはするんだけど……何かねえ……周りの人が自分のこと何か見下してるように感じてたのね。実際そうだったかどうか知らないけど。

I：周りの人っていうのは、大学の人、に限らず、

A：うん、限らず。

I：限らず。

A：……たとえばイベントか何かあってちょっと遊びに行くと、そこで何か受付とか、やってる人が〔見下しているように感じた〕、もうだから半分……なんてのかな、被害妄想に入ってたんだと思うんだけど、……その頃からもう、ちょっと、出たくないなど……

I：イベントって何の？

A：たとえば何か、モーターショーみたいのがあったりすると、たまにいいかなとか思って、行ったりすると、

I：あー、趣味で。

A：あー、半分趣味っていうか、興味で。……そういうのもそうだし。

I：じゃあ、全く知らない人が相手。

A：知らない人でも、

I：うん。

A：何かそういう、被害妄想があって……でね、一応ほら……まあ、卒業までは、何か、バイトとかしないから、やんなかったのね、その頃は。……えーっと、外出するのちょっと、お金ないからもったいなとか思って、だんだん外に出なくなったわけ。お金があるとまあ、交通費ぐらい関係ないやって思っちゃうんだけど、……うん、だから、お金がなかったっつーのは良くなかったね。

I：それでバイトしようと思ったことはないの？

A：うん、その頃からもう、何をしたらいいのかだんだん分かんなくなってたから。

I：うーん。

A：……バイトもね……結局、〔大学〕2年生までしかやってないの。1、2年の時は結構がつがつやってたんだけど、……まあ、2年のこの終わりにちょっと足を骨折して、2ヶ月くらい？

3年の頭くらいまでずっと2ヶ月だか入院してて、まあ、そのひぎをやったんだけど、まだ曲がったり伸びたりだとかはちゃんとしないで、リハビリずっとしてたんだけど、立ち仕事はもうできないと。その年は。すごく楽しいしかできないから……どうしようかと思ったんだけど、病院にも通わなきゃいけないし、とかいって、まあ、この頃から何かもうちょっと何したらいいかわかんない、みたいなものもあるんだけど。で、バイトはここからずーっと、単発のものとかしかしてない。確か。……

I：⑮そうなんだ。じゃあ、Aさんの中では、あ、ひきこもり〔始めた〕と思うのは……〔知らない〕人が何か〔自分を〕見てる、とか、あのへん、感じ始めたところで、

A：⑯……ひきこもりっていうか、何かおかしいなっていう、

I：おかしい、

A：⑰うん、何か違うよっていう、どこで踏み外したんだろうってのが、思い始めたのが、多分、はっきり感じたのがそのへんかな。

I：踏み外したっていう表現を使うじゃない。ってことは……かなり、もうある程度、道があって（略）

まず、私は「今から思う」始まりの時期をどこで「判断」するのか、その根拠を尋ねている（下線部⑮）。すると、Aさんはその答えとして「家にいたってこと自体」ではなく、「実際にそうだったかどうか知らないけど」「周りの人が自分のこと何か見下してるように感じてた」ことを挙げた（下線部⑯）。そして、モーターショーに出かけた時に受付の人からも見下されているように感じたという具体例を出し、そうした「被害妄想」があって「出たくないな」という気分が強まっていったと語る。加えて、外出が減ったことには交通費にあてるお金がなかったことも関係しているとAさんは語り、そこから話題は大学時代のアルバイトに及んだ。大学1、2年生の頃は「結構がつがつやってた」が、2年の終わりに骨折して長期入院した後は「単発のものとかしかしてない」とAさんが一気に語ると、少し間があいた。そこで、私は「そうなんだ」と相槌を打ち、「じゃあ」と言って「ひきこもり〔始めた〕と思うのは」と話題を転換している（下線部⑮）。そして、その時に私が「ひきこもりと思うのは」と言ったところを、Aさんは「何かおかしいな」、「何か違うよ」、「どこで踏み外したんだろう」という表現に置き換える（下線部⑯⑰）。しかし、私はそのことには触れないで“ひきこもり始め”とは別の話題に移行させている。しかも、私はこれ以降、始まりを特定するための質問をほとんど発しなくなった。

以上までのやりとりから、Aさんの“ひきこもり始め”は大学卒業前後で、その根拠は全く面識のない人からも見下されているように感じ始めたことである、と理解していいものだろうか。むしろ、これはインタビュアーである私がAさんから納得のいく答えを引き出そうとインタビュー過程を統制して成立したものと考えられる。

まず、質問の仕方が〔1〕と〔2〕のような“いつから”という具体的な時期ではなく、ある時点“ひきこもり始め”と判断するための根拠を聞き出すものに変化している。これは、大学卒業前には「半ひきこもり生活に入ってた」という語り（下線部⑮）を、具体的な始まりの時期を特定するものとしては十分だとインタビュアーである私が判断したためだろう。ようやくメモに書いた「以前」と「最中」の時期区分に合致する答えを得られたので、別の質問に移ったのである。

次に、大学時代のアルバイトという新たな話題が出たが、間があいたところで一区切りついたらと判断したのだろう。私は「そうなんだ」と相槌を打っている。そして、「じゃあ」とアルバイトについての話を続けるかのように見えて、「あ、ひきこもりと思うのは」と下線部⑩と同趣旨の質問を行い、“ひきこもり始め”の話題を蒸し返している。ここからは、どうにか“ひきこもり始め”を特定しようとする私の意図を読み取ることができる。

ところが、Aさんは私の「あ、ひきこもりと思うのは」という表現を「何かおかしいな」といったものに訂正している。つまり、ここでは、Aさんにとっての“ひきこもり始め”が実際に「人が何か〔自分を〕見て」と「感じ始めたところ」かどうかは別として、とにかく「おかしいな」と自覚したのは大学卒業前後だ、と語られているに過ぎない。だが、それでも私はこの後始まりについての質問を行わなくなっている。このことは、私がAさんの返答を“ひきこもり始め”を特定するものとして十分なものと判断したことを示している。Aさんの“ひきこもり始め”について上述のように理解し、それに納得したからこそ、始まりについて質問する必要がなくなったのである。

このようにして、「インタビュアーは自ら満足できる回答を得るまで統制を行使している」[桜井 2002:151]。そうであるならば、Aさんの語った“ひきこもり始め”はインタビュアーである私とのやりとりの中で生まれたものと捉えなければならない⁽⁶⁾。したがって、Aさんが語ったことを、彼自身がインタビュー以前から明確に考えていたことの表現として素朴に受け取ることはできない。

更に、ある人が“ひきこもり始め”として語ったことは、その人自身による〈ひきこもり〉の具体的な捉え方を表すものとしても読める。たとえば、外出しなくなった時点が“ひきこもり始め”の場合、〈ひきこもり〉とは外出しないことだと言い換えられる。このように始まりをめぐる語りを捉えると、次のことが見えてくる。すなわち、“ひきこもり始め”の特定が難しく、いくつもの始まりが語られてしまうということは、当事者が〈ひきこもり〉という言葉に複数の意味を結びつけていることを示唆しているのである。

だが、それにも関わらず私は“ひきこもり始め”は1つに特定できるはずだ、言い換えれば、〈ひきこもり〉という言葉で明確に指示できる何かがあるはずだ、と暗黙のうちに想定してインタビューに臨んでいた。Aさんに対する「少々面食らってしまった」という印象や「いわゆるひきこもり」という表現、そして何よりも執拗に繰り返された質問からは、そうした私の想定をうかがえる。このような態度の私を納得させようとして、Aさんは“あそこでもない、ここでもない”と、いくつもの始まりを語ることになったのだろう。

以上のように、インタビューとは「語り手のあらかじめ内的にもっている意味」[桜井 2002:79]をインタビュアーが聞き取るようなものではない。語られたことの意味は、インタビューが行われている場で、調査者と被調査者が互いの言葉を解釈し合う過程を通じて徐々に確定されていく（更には語りを編集する過程で）。ここで取り上げている“ひきこもり始め”とは、インタビュー以前から存在していた所与のものでは決してなく、遡及的に解釈されたものなのである。

このように、インタビュー過程を統制するのはインタビュアーであり、それゆえインタビュアーが依拠する枠組みはその場で語られるストーリーに影響を及ぼす。そこで、次にインタビューの際に、私がどのような枠組みを自明としていたか明らかにしたい。

(3)「定義／診断」することの限界

自分が依拠していた枠組みを意識化する契機となったのは、インタビュー場面でのある「異和感」だった。「異和感」とは、「何らかの“差異”を特定の基準に照らしたときに生じる」ような“ずれ”の感覚、すなわち「特定の他者による言動が、予想や期待とずれているときに感じ取られる」ものである。宮本によれば、〈異和感の対自化〉によって「自分の知識や価値観の特徴と限界についての気づき」が与えられる〔宮本 2001:35-38〕。では、私が参照していた「特定の基準」とはどのようなものだったのか。

“ひきこもり始め”についての語りが単に始まりそのものだけでなく、その人自身の〈ひきこもり〉の捉え方を表しているのではないかと考えるようになって、私は意図的に「今から思うひきこもり始めはいつですか？」という質問からインタビューを始めることにした。この質問に対する答えの中で、2名の対象者がためらうことなく何らかの“悩み”を抱え始めた時のことを語ったことが印象に残っている⁽⁷⁾。たとえば、そのうちの1人は、中学時代に友人との関係が気まづくなったことがきっかけで「何かトラブルが起きちゃうとすぐ逃げちゃう癖」がついた時だと答えた⁽⁸⁾。このことから、彼らが“悩み始め”と“ひきこもり始め”を互換的に捉えていることがうかがえる。しかし、私はそうした答えに対して2度とも戸惑いを覚えた。それを文章化すれば、「私が“ひきこもり始め”を尋ねたのに、何故この人は“悩み始め”を語るのだろうか？」といったところだろうか。

この「異和感」の意味が明確になったのは、インタビューを全て終わらせてトランスクリプトを作成し、編集作業に入ってからのことだった。その戸惑いとは、始まりについて質問すれば、いつから人に会わず外出しなくなったかが語られるだろう、という自分の期待にそぐわないことが語られたことに対して生まれたものだった。つまり、私の「異和感」の源泉である「特定の基準」とは、外出や他者との接触を忌避することが〈ひきこもり〉だ、といったような3節の冒頭で引用した斉藤環が挙げたイメージに重なるものだったのである。そして、それはインタビューに先立ってメディアから得ていた知識、すなわち「治療／援助」の文脈で行われた議論から得た知識だった。

要するに、「治療／援助」の枠組みでは聞くことのできない当事者の「声」を聞くことを目的としてインタビューを行ったにも関わらず、結局私はその枠組みにあてはまるような語りを期待し、なおかつそれに沿うようなストーリーを対象者に語らせようとしていたのである。回数を重ねるごとにインタビューのやり方も変化していっただろうが、程度の差こそあれ、他の対象者にもAさんと同じように語らせていたことは想像に難くない。

さて、先に述べたように〈ひきこもり〉という言葉には複数の意味が結びついている。だからこそ、複数の“ひきこもり始め”が語られ得るのであり、いつから“ひきこもった”と言うこともできないのである⁽⁹⁾。仮に「以前」と「最中」とを明確に分けられたとしても、それは特定の枠組みに依拠した解釈可能性の1つに過ぎない。たとえば、私は1度目のインタビューで、大学卒業前後に見知らぬ人からも見下されているように感じ始め、外出しにくくなっていった時点をAさんの“ひきこもり始め”と理解したが、そのように認識できたのは、〈ひきこもり〉とは外出や他者との接触を忌避することだ、という図式があらかじめ成立していたからに他ならない。そして、その図式に照らして、“ひきこもり始め”として解釈可能な他のいくつかの語りをしりぞけたからなのである。

以上から、〈ひきこもり〉を「定義／診断」することの限界を指摘しておきたい。たと

えば、青少年自立援助センターの工藤定次による「『家から外に出られない』状況の子ども（大人）を指すことであり、それ以上、それ以下ではない」[工藤・スタジオポット1997:58]という「定義」は明快だ。しかし、これはあくまで（工藤が考える）「治療／援助」の枠組みに合わせて切り取られた〈ひきこもり〉である。もちろん、それが「現場」での実践を念頭に置いたものである以上、一概に批判することはできない。だが、たとえばAさんが「厳密には」と形容した大学2年次の学科選択のことなど、そうした「定義／診断」には収まらない当事者の語りを看過することもできない。

ところで、1度目のインタビューも話題が出尽くし、雑談が増えてきたところで「もし言い残しがあったら」と言うと、Aさんは少し間を置いて次のように語り始めた。

[4]

A：だから、本当ね、人それぞれだから。ひきこもりって名前を与えるのはすごい便利なんだけど……じゃあ……全部一緒かっていったら違うわけで……すごい大きな概念で、十人十色で千差万別だから……あんまり一括りにはできないし……

I：できないし、されたくもない。

A：されたくもない。違う人が現にいるわけだから……ほんと何か分かってない人は、ひきこもり、何かあんな感じの人でしょ？ってごく限られたイメージでいいんだけど、……まあ、そういう人が、したり顔して何か言っていると……ぶちぶちぶちって〔頭に〕くるけど、別に……馬鹿は馬鹿でいいだろうって感じでいいだろうと（笑）〔そんなことを言われても〕知らねーよ（笑）

「ひきこもりって名前を与えるのはすごい便利なんだけど」「違う人が現にいるわけだから」「あんまり一括りにはできない」とAさんは語る。そして、「一括り」に「されたくもない」という私の合いの手を繰り返し、「ごく限られたイメージ」しか持たない人に「したり顔」をされると「ぶちぶちぶちって〔頭に〕くる」と続けている。

Aさんが嫌悪感を示すような「したり顔」をして当事者を「一括り」にすることと、臨床家や援助者が〈ひきこもり〉を「定義／診断」することの間に、どれほどの距離があるのだろうか。そして、この問いかけは私が行った一連のインタビューに対しても同様に向けられねばならない。インタビュアー／研究者である私が、当事者であるAさんの「声」を「限られたイメージ」に重ね合わせようとしていたことは既に見た通りだ。では、そのことと〈ひきこもり〉を「定義／診断」することは同じなのだろうか。

臨床家や援助者は「治療／援助」を直接の目的とし、その対象と方法を定めるために〈ひきこもり〉を「定義／診断」し、それを自明の前提とするところから議論を出発させる。一方、私／研究者は「定義／診断」では排除されたような当事者の「声」を聞くことを第一の目的とする。この点において両者は全く異質な営みのように思われる。しかし、実際には私もまた、インタビューの際に特定の〈ひきこもり〉のイメージを自明のものとして扱い、それと一致しないようなAさん／当事者の「声」を切り捨てていたのである。

ここで冒頭の問いに戻ろう。ある「問題」の当事者に対してインタビューを行えば、それは当事者の「声」を聞いたことになるのだろうか。

4. 結論

ここまでの要点は以下2点である。第一に、“ひきこもり始め”の特定をめぐって行わ

れた私（インタビュアー／研究者）とAさん（対象者／当事者）との相互行為を通じて、〈ひきこもり〉の意味が共同的に構築されていること。第二に、インタビューに先立って得ていた知識に基づく暗黙の前提から、インタビュアーである私がインタビュー過程を統制し、なおかつその前提に合致するような内容をAさんに語らせようとしていたこと。

以上を踏まえ、本稿では冒頭の問いに対して次のように答えたい。すなわち、「純粹」な当事者の「声」などというものはなく、それはインタビュアー／研究者と対象者／当事者との相互行為を通じてしか生まれ得ないものである。

当事者の「声」はインタビュアーが依拠する枠組みに合わせて切り取られた形でしか聞くことができない。しかし、だからといって「無心でインタビューを遂行」[桜井2001:171]すれば、インタビュー過程を統制することなく、ありのままの「声」を聞けるというわけでもない。どれほど慎重にインタビューを進めても、「無心」になることは不可能だろう。むしろ、何らかの枠組みに照らしてこそ語りを解釈し理解することが可能になるのだから、ここで求められるのは「無心」でインタビューに臨むことではない。そうではなく、「意識するしないにかかわらず、またそれが一貫しているかどうかにかかわらず、インタビューに際して一定の構えをもっていることを常態であると認め」ること、そして「その構えがどのようなものであるかに自覚的」になることが肝要なのである[前掲書 :171]。

いくら当事者にインタビューを行い、それを記述したとしても、自らが保持する「一定の構え」を意識化しない限り、そこにインタビュアー／研究者の解釈以上のものを見出すことはできないだろう。「純粹」な当事者の「声」などなく、インタビュアー／研究者の解釈を組み込んだ形でしか現れないのであれば、なおさらインタビュアー／研究者は自らの解釈を可能にさせている枠組みに敏感でなければならない。まさにこの点において、臨床家や援助者による〈ひきこもり〉の認識と、研究者によるそれとは異なったものになる。

また、以上のような視点は「当事者」という言葉の再認識を迫る。2節ではこれを本人の自己認識を表すものに限定して用いると述べた。だが、〈ひきこもり〉をはじめとする様々な「問題」の意味が、インタビューという相互行為実践を通じて構築されるのなら、インタビュアー／研究者もまた「当事者」性を有している。この観点からすれば、「当事者の『声』を聞く」ということは、インタビュアー／研究者である自分自身の「声」をも聞くことに他ならないのである。

〈ひきこもり〉の意味を、たとえば「定義／診断」といった形で1つに固定して理解することは易しいが、その反面、そうした「分かりやすさ」は〈ひきこもり〉を「分かりきったもの」のように錯覚させる。しかし、〈ひきこもり〉という言葉に1対1で対応するような意味はないのだから、それはただ「分かったつもり」になっているに過ぎない。また、その「分かりやすさ」が他の可能性を排除して成立している以上、それに基づいた「処方箋」も当然「万能」ではない。それならば、今ある「分かりやすさ」を相対化していくことが必要とされる。この時、当事者の「声」を聞くことがその契機となり得るのではないだろうか。つまり、〈ひきこもり〉の意味は相互行為を通じて共同的に構築されるという前提に立ち、自分自身が自明とする枠組みを明らかにしつつ、ある特定の解釈がどのように成り立っているのかを読み解くことで、他の解釈可能性を示唆するのである。更

に、これを通じて既存の〈ひきこもり〉の理解を支えている議論とは異なる視点を示すことが可能になるだろう。これは今後の課題である。

註

- (1) この「声」は、エマーソンらによる「個人の独特の語りのスタイルおよび特徴的な視点もしくは『氣質』^{キツス}の両方をさすもの」[Emerson, Fretz & Shaw 1995:訳456] という定義とほぼ同義。本稿では〈ひきこもり〉に対する当事者自身の視点や意味づけを指す。
- (2) 1999年12月京都小学生殺人事件、翌年1月新潟監禁事件、5月佐賀バスジャック事件。
- (3) 当事者による著作は[勝山 2001][上山 2001]。また、当事者へのインタビューを集めたものは[田辺 2000][塩倉 2000]等。
- (4) 最初はインターネットを通じて自助グループの代表者に連絡を取って話を聞いた。その時に「経験者・家族・支援者」による会合を紹介してもらい、以後その会には定期的に参加している。なお、どちらも医療機関や援助機関との提携はない。
- (5) 本文中の「 」で括った部分はインタビューで語られた内容の引用、引用中の〔 〕で括ったものは文意を分かりやすくするために後で補ったもの。Iは筆者、Aは対象者。
- (6) 後日Aさんにトランスクリプトを渡して感想を聞いたところ、自分でもいつ“ひきこもり始めた”かは整理できていなかったのでもしろかった、と話していた。こうした機会がなければAさんが自分の“ひきこもり始め”を特定することもなかったのだろう。
- (7) 2001年7月25日(7度目)・7月29日(8度目)。
- (8) 2001年7月25日(7度目)。この対象者もまたAさんと同様、これ以外にも“ひきこもり始め”と解釈できることをいくつか語った。
- (9) 2度目のインタビューで改めて「自分が過去を振り返ってここからがひきこもりかもねえっていう基準を設けられる？」と尋ねたところ、Aさんは「ひきこもり始めについて言えば、ここがっていうポイントはないね」と語った。

文献

- Emerson, R.M., Fretz, R.I. & Shaw, L.L., 1995, *Writing Ethnographic Fieldnotes*, The Univ. of Chicago Press.
佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋(訳)『方法としてのフィールドノート——現地取材から物語作成まで』新曜社 2000.
- 勝山 実 2001 『ひきこもりカレンダー』文春ネスコ.
- 工藤定次・スタジオポット 1997『おーいひきこもり、そろそろ外へ出ないか』ポット出版.
- 宮本真巳 2001 「臨床社会学の体験と方法——精神看護の実践・研究を通して」大村英昭・野口裕二(編)『臨床社会学の実践』有斐閣 pp.25-52.
- 斉藤 環 2002 『「ひきこもり」救出マニュアル』PHP研究所.
- 桜井 厚 2002 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 塩倉 裕 2000 『引きこもり』ビレッジセンター出版局.
- 田辺 裕 2000 『私がひきこもった理由』ブックマン社.
- 上山和樹 2001 『「ひきこもり」だった僕から』講談社.

(東京都立大学大学院社会科学研究所